

# ノルマンディー公ギヨーム 2 世と ヘイスティングズの戦い

川 瀬 進

## 目 次

- I. はじめに
- II. ブリテン
- III. ギヨーム 2 世
- IV. ヘイスティングズの戦い
- V. おわりに

### I. はじめに

イングランド史、およびイングランド経済史を研究する上で、必ず把握して置かなければならない事柄に、ヘイスティングズの戦いがある。このヘイスティングズの戦いは、王位継承に関して、1066年にイングランド海峡をはさんだアングロ=サクソン人 (the Anglo-Saxons) vs. ノルマン人 (the Normans) の戦いであった。具体的には、アングロ=サクソン王ハロルド 2 世 (Harold II, 1066年1月10月) vs. ノルマンディー公ギヨーム 2 世 (Guillaume II, 1035-1087) である。

この戦いが、なぜ重要視されるかということ、今現在のイングランド王室に深く関わっているからである。そこには、ブリテン (BRITAIN) という名前の由来にも関わってくる。

またこの戦いが、その後、イングランドが経済発展を続けるための重要な要因になったからでもある。

その重要な要因を把握するには、当然、そのイングランドの土壌、風土、歴史を把握しておかなければならない。

そこで本稿では、ノルマンディー公ギヨーム 2 世以前の、またその当時の地

理的・歴史的背景を、正確に把握すると共に、なぜギヨーム2世が、執拗までにイングランドの王位にこだわり、イングランド王位を奪取したか、考察する。またさらに、この1066年のヘイスティングズ戦いが、イングランドの経済史的側面に、どのような意義があるかをも、考察する。

## Ⅱ. ブリテン (BRITAIN)

1066年のヘイスティングズの戦いを考察するには、ブリテンの地理的・歴史的背景を把握しておかなければならない。

というのは、ブリテンがヨーロッパ大陸と近接しており、紀元前の記録が残っていない時代から、そのヨーロッパ大陸の移住者から、多大な影響を受けていたからである。具体的には、現在のノルウェー、デンマーク、ドイツ、オランダ、ベルギーに接しており、その国々の地域の移住者から、またイベリア半島のスペイン、ポルトガルの地域の移住者から、年代的には紀元前約3000年頃から、ブリテン南部の原住民が影響を受けたからである。

イングランドの歴史家の中に、特に初期のイングランド史を取り扱った著述家にベータ (Bede: Baeda, 673-735) がいる<sup>1)</sup>。

ベータがラテン語で執筆した主著『イングランド国民教会史』 (Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum: Ecclesiastical History of the English People: A History of English Church and People, 731) は、科学的に、論理的に精査された書物であり、初期イングランド史の著述としては、第1級の史料である。

このラテン語で書かれた『イングランド国民教会史』を、アングロ=サクソン語、古期英語に翻訳させたのは、アルフレッド大王 (Alfred the Great, c. 848-c. 900) である<sup>2)</sup>。

このベータの主著『イングランド国民教会史』が、初期イングランド史の第1級の史料として評価されるのには、2つの理由がある。

第1は、ブリテンにおけるローマ政府の終わりから、初期イングランド王国の危機的状態に至るまでの長期間の間、歴史を綴った史料がなかったこと<sup>3)</sup>。

第2は、ベータのこの著作物が、ブリテンにおけるピクト族 (the Picts) や、アングロ=サクソンの定住生活について書いてあり、その書き方の根拠が、当時の人びとの口述や、ジャロー (Jarrow) 修道院の図書館からの情報や本を基にし、それらを、より科学的・論理的に精査し書いたこと<sup>4)</sup>。

この史料の執筆によりベータは、「『イングランド史の父』<sup>5)</sup>」、「尊者ベータ (The Venerable Bede)<sup>6)</sup>」という敬称を得た。

ベータは、この『イングランド国民教会史』の中で、「ブリテン (BRITAIN) は、昔アルビオン (Albion) として知られており、ゲルマン、ガリア、スペインの沿岸からかなり離れた北西に位置している海洋の島である<sup>7)</sup>。」と述べている。

イングランド人であるベータが、目に見える文書記録として初めて、ブリテンという言葉を使用したのである。

当然、初期イングランド史を考察するにあたっては、ブリテンという言葉を使用する前に、時代的背景からいって、アルビオンという言葉を使用しなければならぬ。

### ①アルビオン (ALBION)

イングランドを含むアルビオンに、人類の小集団が住み着いたのは、氷河期後期、気候が少し暖かくなった時であった。

この時期まだ、アルビオンは、イングランドの沿岸と大陸のロー=カンTRIES (the Low Countries)<sup>8)</sup> と陸続きであった。

当時の住民は、生活の糧を得ながら移動する狩猟民、漁撈民、採集民であった。彼らの主要な生活用具は、フリント (Flint: 燧石、火打ち石) であり、その小片を使用して、火を起こしたり、矢尻を作ったりして生活していた。

この陸続きがなくなったのは、気温が上昇し氷河が溶け、水位が上昇した紀元前約6500年のことであった<sup>9)</sup>。

紀元前約4500年から、気温の上昇と共に、寒冷地動物の鹿や、鹿を捕食とする他の動物が大量に死滅したため、採集狩猟民 (Hunter-gatherers) は、農業

をはじめた。そして、肥沃な土地に村ができた。紀元前約3500年に、イングランド南部において、農耕に適した犁 (Plough) が用いられるようになった<sup>10)</sup>。

紀元前約3000年 (新石器時代) に、アルピオンにヨーロッパ大陸から渡来してきたのは、イベリア人 (the Iberians) であった。彼らは、イベリア半島 (Iberian peninsula) から大西洋沿岸を北上してやって来た<sup>11)</sup>。

このイベリア人は、アルピオンに上陸すると、コーンウォール (Cornwall) 地方やウェイルズ、アイルランドへと、移住していった。また、彼らは、今日のイングランド人、ウェイルズ人、スコットランド人、アイルランド人とは、多少異なるものの、遠い祖先にあたる。

紀元前約2400年になると、アルピオンのコーンウォール地方に、ヨーロッパ大陸から新しい人びとの集団・ビーカー族 (the Beaker Folk) がやって来た<sup>12)</sup>。

ビーカー族、すなわちビーカー人は、先住民のイベリア人よりも生活的技術が上であった。具体的には、彼らはすでに、どこでも生育できる新しい穀物や、青銅器の鑄造技術を手にしていた。ゆえに、この経済的水準のやや高いビーカー人が、イベリア人よりも、ヨリ高い指導的立場に立った。

この青銅器を使用しているこのビーカー族は、自分たちの定着した土地・現在のブリテン島を、アルピオン (Albion) と呼んでいた<sup>13)</sup>。

ここで初めて、ブリテン島を表記する地名・アルピオンという言葉が登場した。

アルピオンとは、ラテン語の「白い土地」、白亜質の丘という意味。イングランド南東部イースト=サセックス (East Sussex) 州の南部海岸イーストボーン (Eastbourne) のセヴン=シスターズ (The Seven Sisters) を見れば、わかる。

セヴン=シスターズは、白亜質の土地で、しかも絶壁な丘である。このため、ビーカー族が、この地を「アルピオン」と呼び、その後、ローマ人が、この地を「アルピオン」という言葉に、表記したのもわかる。

この「アルピオン」という呼び方、および表記により、大陸からやって来た

2007年3月 川瀬 進：ノルマンディー公ギヨーム2世とヘイスティングズの戦い

ピーカー族が、まず初めに、ブリテン島の東南部から浸入して来たということが確認できる。

## ②ブリタンニア (BRITANNIA)

紀元前約700年頃になると、さらにブリテン島であるアルピオンに、別の新しい人びとの集団、すなわちケルト族 (the Celts) がヨーロッパ大陸からやって来た。主として移住して来たのは、紀元前600年頃、ハルシュタット (Hallstatt) からのケルト族であった<sup>14)</sup>。

このケルト族は、3つの種族の人びとに分けられる。

- ・現在のアイルランドやスコットランドに住むゲール人 (the Gaels) (このゲール人は、さらにピクト人とスコット人 (the Scots) とに分けられる)。
- ・現在のウェイルズやコーンウォールに住むブリトン人 (the Britons: the Brythons)。
- ・ローマの執政官 (Consul) カエサル (Gaius Julius Caesar, 100-44 B.C.) のガリア遠征時に渡来したベルガイ人 (the Belgae)。

ケルト族の中で、最大でかつ大部分のブリトン人がコーンウォールに住み着き、しだいに勢力を拡大し、各地に散らばっていった。このアルピオンに居住するケルト族のブリトン人たちは、自分たちのことを、Pサウンド語系に属するブリソニック、あるいはブリトニック ('Brythonic' or 'Brittonic': ブリトン語)<sup>15)</sup> のケルト名で、プリタニ (Pritani) あるいはプリテニ (Priteni) と呼んでいた<sup>16)</sup>。

ケルト族のブリトン人たちが、アルピオンで勢力を拡大させることができた背景には、もともと居たアルピオンの原住民よりも、身を守る武器、生活能力が上だったからである。

その後、ローマの執政官カエサルの遠征時 (55B.C.)、ブリテン島を表記するアルピオンが、プレタニック=アイランズ (Pretanic islands) になっていた<sup>17)</sup>。

そこで、執政官カエサルは、このプレタニ (Pretani) という地名が間違えと

して、ラテン語名「ブリタンニア」(Britannia)と訂正した<sup>18)</sup>。このラテン語の「ブリタンニア」(Britannia)は、英語読みでは「ブリタニア」になる。

この訂正により、「ブレタニ島」は、「ローマの属州ブリタンニア」になった。

このカエサルの訂正において、次のことに注意しなければならない。

それは、なぜカエサルが、すでに存在していた地名「ブレタニ」を、ラテン語名「ブリタンニア」にしたのか、ということである。

討伐者・侵略者は誰でも、自分が征服した土地を、全世界に知らしめるために、自分自身に関係した名前を付ける。カエサルも例外ではなく、このブレタニ島「Pretanic isles」の侵略を、少しでも価値ある出来事として、評価したかったのである。

また、「ブリタンニア」という名前を付けた理由は、カエサルが最初に遠征した地が、北ガリア地方<sup>19)</sup>・現在のブーローニュ(Boulogne)近くの「ブリタニー」(Britanni)といわれる人びとが住んでいる地であり、その最初の征服を記念したかったのである<sup>20)</sup>。

ローマの執政官カエサルが、ブリタンニアの遠征を企てたのは、2回である(55B.C. and 54B.C.)。

カエサルの遠征目的は、2つある。

1つ目は、カエサル自身の征服欲のため。

2つ目は、反乱の火種にも成りかねない北ガリア地方への経済的輸送ルートを断ち切るため。

ローマの執政官、すなわちローマの最高官職に就いているカエサルは、ローマの領土を拡大・繁栄させるために、ガリアに侵攻した。そして、ガリアでの一応の征服が終わると、次に、ブリタンニアをガリアの1部にするために、侵攻した。これら全て、カエサルの名誉欲と征服欲のためである。

また、カエサルは、ローマの執政官であるため、征服地・ガリアの治安を、恒常的により安定的に維持しなければならない。そこで、ブリタンニアから同じケルト民族の住むガリアへ、経済的軍事援助物資を送っていた輸送ルートを

断ち切らなければならなかったためである。

第1回目の遠征は、紀元前55年8月最後の週で、カエサルは、ローマ軍歩兵隊2軍団を率いてブリタンニア南部の海岸に上陸した<sup>21)</sup>。最初、カエサルが上陸しようと考えた所は、南部沿岸のドーヴァー（Dover）近くの安全地帯であった。だが、そのドーヴァー近くの絶壁の続くホワイト・クリフ（White cliffs、白亜質で絶壁な丘）では、もうすでにケルト族のベルギー人（the Belgae）戦士が戦闘準備を整え、1列に整列していた。そこで、カエサルは、そこを避け、海岸沿いに絶壁の見えない所に、かろうじて上陸した。そしてその地で、カエサルは、ケルト族の猛攻に遭い、3週間でガリアに帰った。

第2回目の遠征は、翌年の紀元前54年7月最初の週で、カエサルは、ローマ軍歩兵隊5軍団2,000人を率いて、サンドイッチ（Sandwich）近くに上陸した。だが、このカエサルの第2回目の遠征も、失敗に終わった<sup>22)</sup>。

その後、ブリタンニアは、徐々に征服されて行ったものの、100年の間、ローマ帝国の内紛により、平和な時期を過ごしていた。

だが、43年になると、ローマ皇帝クラウディウス（Claudius）の命により、ローマ軍が再び本格的に、ブリタンニアに侵攻し<sup>23)</sup>、ブリトン人の首都カムロドゥヌム（Camulodunum）を占領した<sup>24)</sup>。

この侵攻に対して、61年に反乱を起こしたのは、ケルト貴族であり・ブリトン人である、イースト＝アングリア（East Anglia）地方のイケニ族（the Iceni）の女王ボアディケア（Boadicea）であった<sup>25)</sup>。女王ボアディケアは、侵略と虐待に怒ったトリノヴァンテス族（the Trinovantes）とカトゥヴェラウニ族（the Catuvellauni）とを率いて、ローマ化されてしまったカムロドゥヌム植民地を攻撃し、ロンディニウム（Londinium：現在ロンドン、London）を、略奪した。だが、この反乱は、失敗に終わった<sup>26)</sup>。

この失敗によって、ブリタンニアは、正式にローマ属州ガリアの1部ブリタンニアになった。

その後、ブリタンニアは、北部スコットランドのハイランド地方を除いて、平穏にローマ化され続けた。

120年頃になると、ローマ皇帝ハドリアヌス（Hadrianus, 117-138）は、ケルト族の1部族ピクト族や、スコット族に対して、脅威を、感じるようになった。

この脅威は、ローマ側の立場から見ての感じ方であり、ピクト族、スコット族にとっては、そうではない。彼らにとって、自分たちの領土に、勝手に侵攻してくるローマ軍に反抗するのは、当然の結果であった。この反抗に対して、ローマ軍は、彼らを野蛮人と考えるようになっていた。

そこで、これらの脅威・反抗を取り除くために、122年、ハドリアヌス皇帝は、征服したブリタンニアの最北部に、物理的な障壁となる土塁の建造を命じた。いわゆる、ピクト族、スコット族の侵入を防ぐための長い障壁・芝土塁壁であるハドリアヌスの長城（Hadrian's Wall）の建造である<sup>27)</sup>。

また、その後、ブリタンニアでのローマ帝国のさらなる野望は、新たなる征服地獲得へと動いた。具体的には、ハイランド南部への侵攻である。138年アントニヌス=ピウス（Antonius Pius, 138-61）は、ローマ皇帝になると、ハイランド南部の征服地を、確固たるものにするために、ピクト族、スコット族との境界線に、新しい芝土塁壁の建造を命じた。いわゆる、142年に建造が始まったアントニヌスの長城（the Antonine Wall）である<sup>28)</sup>。

このアントニヌスの長城は、ブリタンニアのローマ領を、北部種族からの攻撃に対して、障壁として、建造されたものである<sup>29)</sup>。

これら2つの長城の建造は、ローマ皇帝たちが、ピクト族、スコット族の領地を、平和的に友好的に、侵入・獲得できなかった結果であった。ピクト族、スコット族が住むハイランド地方は、荒地に群生し低木であるヒース（Heath）や、トゲのあるシスル（Thistle：アザミ）に覆われた大草原であり、地理に熟知した彼らを、ローマ軍が追いかけ、攻撃することは、不可能であった。

言い換えれば、ローマ軍は、アントニヌスの長城を建造することによって、ローマ領地から、野蛮人と称せられるピクト族、スコット族を、追い出したのにすぎなかった。



その後、約200年の間、アントニヌスの長城以南のブリタンニアでは、多少平穏にローマ化が進み、ローマ文化が浸透してきた。特に、ローマ化されたのは、南東部の地味の豊かな平野地帯に住むブリトン人たちである。そして、その中心地ロンディニウム（Londinium）で<sup>30)</sup>、ブリトン人たちは、準ローマ市民になり、ラテン語を話すようになっていた。反対に、あまりローマ化されなかったのは、西部（ランカシャー、ウェイルズ、コーンウォール）の山脈や山地に住む孤立したケルト族たちであった。

この当時のローマ皇帝コンスタンティヌス1世（Gaius Valerius Constantinus I, 323-337）は、ローマ帝国全土に、キリスト教を、公的信仰とした。当然、ブリタンニア全土でも、キリスト教の布教活動が行われた<sup>31)</sup>。中心地のロンディニウム周辺は、急速にキリスト教が広まったが、遠い地方では、余り芳しくなかった。ただし、遠い地方のウェイルズだけは例外で、キリスト教が、急速に広まっていた。

この200年の間、多少平穏な時期に至っていたとしても、ブリタンニアの東部海岸では、サクソンの海賊が掠奪襲撃を行っていた<sup>32)</sup>。

そして、367年に、ピクト族、スコット族、アッタコッティ族が、北ブリタンニアに侵入して来た<sup>33)</sup>。言い換えると、ピクト族が、アントニヌスの長城、ハドリアヌスの長城を破り、また、スコット族が、海を超えランカシャー地方に、侵入して来たのである。

この大軍に侵入によって、北部ローマ軍は混乱に陥った。混乱に端を發して、軍が反乱を起し、北部の駐屯地は、指揮命令系統が崩れた。

北部ローマ軍の秩序を回復するために、ローマ皇帝は、将軍テオドシウス（Flavius Theodosius, c. 346-395：後のローマ皇帝379-395）伯を、大陸からロンディニウムに派遣した。このことにより、ローマ軍の秩序は回復し、再び、ブリタンニア北部からの侵入者を、食い止めることができた。

だが、382年にまた、ピクト族が北部に侵入してきた。このピクト族を撃退させたのは、ブリタンニアでのローマの軍司令官マグヌス＝マクシムス（Magnus Maximus, 383-388）である<sup>34)</sup>。この撃退に気を良くしたマクシム

スは、383年に自らを皇帝と称した。マクシムスは、本当の皇帝になるため、ブリタンニアでの大部分の軍隊を引き連れ、西ローマ帝国の皇帝グラティアヌス (Flavius Augustus Gratianus, 359-383) に、戦いを挑んだ。結果は、マクシムスの勝利であったが、その後、マクシムスは、東ローマ帝国の皇帝テオドシウス1世 (Flavius Theodosius I, 379-95) に、打ち破られ、388年に亡くなった<sup>35)</sup>。

度重なる野蛮人の大軍に対処するために、ローマ中央政府は、396年、将軍スティリコ (Flavius Stilicho, ? -408) を派遣して、ブリタンニアの主要な駐屯地の秩序を立て直そうと試みた<sup>36)</sup>。だが、この試みは、ローマ本国の、主導権争いや、中央ヨーロッパからの蛮族の圧力によって、ローマ中央政府からの十分な配慮を受けられなく、失敗に終わった。また、この秩序回復の試みは、ローマ帝国がブリタンニアを、属州として残そうとした最後の努力であった。この失敗により、ブリタンニアは、ローマから見て、「はるかかなたの場所<sup>37)</sup>」になった。

400年頃になると、ブリタンニア北部から、ピクト族、スコット族の侵入が、ますます激しくなり、防壁守備隊だけでは、治安を維持することができなくなっていた。

この治安を維持するために、ローマ皇帝ホノリウス (Flavius Honorius, 395-423) は、軍の1番低い階級の兵士であったコンスタンティヌス (Constantinus, ? -411) に、法的権限を与え、ブリタンニアでの任務に就かせた。コンスタンティヌスは、ローマ皇帝の皇位を奪うために、ブリタンニアからガリアに行き、ローマ皇帝ホノリウスに近づいた男であり、運良く皇帝のパートナーに成れた男であった。

コンスタンティヌスは、407年、自己の野望のため、ブリタンニアでの防壁守備隊をも含むほとんどの兵士を連れて、海を渡り、ガリアのライン地方に出征した<sup>38)</sup>。この出征は失敗に終わった。407年の時点で、ブリタンニアでのローマ軍は、ほとんどガリアに撤退してしまった。そこで、ブリタンニアでのローマ支配は終わり、ブリタンニアは、もはやローマの属州ではなくなった<sup>39)</sup>。

蛮族の侵入に困り果てたブリタンニアのブリトン人は、ローマ皇帝ホノリウスに援軍を要請した。

これに対して410年、ローマ皇帝ホノリウスは、以下2つの理由により、要請を断り、ブリトン自身で自衛するよう通告した。

1つ目は、中央政府軍の秩序回復が不可能になったこと。

2つ目は、ローマ帝国自体、蛮族の侵入によって危機的状態に置かれていたこと。

この通告のより、ローマ皇帝ホノリウスは、ブリタンニアでの法的支配を、終わりにした<sup>40)</sup>。

ブリトン人は、近い将来、ローマ軍が再び、属州ブリタンニアに戻ってくることを期待した。だが、このローマ皇帝ホノリウスの書簡によって、遠くに投げつけられた属州は、見捨てられ、ブリトン人の期待は、裏切られたのであった<sup>41)</sup>。

これにより、ブリトン人は、自らが団結し、ブリタンニア北部、および東部沿岸を外敵から守らなければならなくなった。

407年のローマ軍の撤退と時を同じくして、ブリタンニア東部沿岸では、大軍をなしたアングル族 (the Angles)、サクソン族 (the Saxons)、ジュート族 (the Jutes) が渡来、浸入してきた。

この大軍の渡来、浸入理由は、彼らの住むスカンディナヴィアと北ゲルマニアからの民族移動である。言い換えると、4～5世紀に行われた第1次ゲルマン民族の大移動である。

この民族大移動のルートがブリタンニア東部沿岸になったのは、距離が近かったことと、イングランド東部Norfolk州とLincolnshire州との中間にあるウォッシュ (Wash) 入江から、ワイト島 (Wight) までのブリタンニア海岸、すなわち「サクソン海岸 'the Saxon shore'<sup>42)</sup>」を掠奪襲撃していたサクソン人の海賊が航海、およびその東部海岸の地形を熟知していたからである。

ローマ化されていたブリトン人たちは、必然的にローマ軍なしで単独で、アングル族、サクソン族、ジュート族と戦わなければならなくなった。

このアングル族、サクソン族、ジュート族が、最初にブリタンニアにやってきたきっかけは、カレドニアから浸入して来たピクト族や、アイルランドから侵入して来たスコット族と戦ってもらうため、いわゆる傭兵として雇われたためであった<sup>43)</sup>。

傭兵ではなく、侵入者としてやってきたアングル族、サクソン族、ジュート族は、いずれもゲルマン民族に属する。

ローマ軍が去った後、449年、中央ウェイルズで支配を行っていたブリトン人の‘高貴な王’フォルティゲルン (Vortigern) は、ゲルマン民族に属するこの3つの部族を総称して、サクソン族と呼んでいた<sup>44)</sup>。

フォルティゲルン王がこのように呼んだ背景には、最初にケント地方と東海岸に定住したのが、サクソン族であったからであろう<sup>45)</sup>。また、フォルティゲルン王は、アングル族にも、ケント地方の南東の土地を、ピクト族と戦う条件で、与えていた<sup>46)</sup>。

ゲルマン民族の大移動のうち、ブリタンニアに渡来してきたアングル族、サクソン族、ジュート族を、「アングル=サクソン民族の移動」と称することができる。

というのは、スカンディナヴィアと北ゲルマニアから、ブリタンニアに渡来してきた民族のうち、圧倒的に大多数を占めていたのが、アングル族とサクソン族であったからである。また、その2つの民族は、ブリタンニアに渡来、侵入する前までに、すでに融合していたからである。

また、この3つの民族のうち、ブリタンニアで1番初めに王国を創ったのは、サクソン族であり、その後、遅れて王国を創ったのが、アングル族であった。この2つの民族が、前ローマ領の属州であった全域を、ほぼ占領したのである。

そこで、この3つの民族を総称して、アングル=サクソン族ということが出来る。

このアングロ=サクソンは、現代使われている英語の祖になった古代英語を話した。

なお、アングル族のアングル (Angle) は、現代のイングランド (England) になった<sup>47)</sup>。というのは、「アングル族の土地」=「Angland」=「England」になったからである。

このイングランドという言葉が実際に使用できるのは、マーシア (MERCIA) の王ウルフヒアー (Wulfhere, 657-674) が、670年に、ロンドン を制圧、全イングランドを統一ブレトワルダ (Bretwalda) になり<sup>48)</sup>、そして、その後、マーシア (MERCIA) の王オッフア (Offa, 757-796) が、757年に、全イングランドの王ブレドワルダとして即位してからのことである。

この時期、イングランドにおいては、ウイタン、あるいはウイテナジモット (Witan or Witenagemot) と呼ばれる賢人評議会が発足されており、そのウイタン、あるいはウイテナジモットで、イングランド王を、選出することになっていた<sup>49)</sup>。

407年のアングロ=サクソンが、ブリタンニアに渡来、侵入、進攻してきた以降、ローマ読みブリタンニア (Britannia) が、英語読みブリタニアになった。

### ③ブリタニア (BRITANNIA)

ブリタニアに渡来、侵入、進攻してきたアングロ=サクソンは、ブリトン人の文化の中心地であったロンドン (London=Londinium：ロンドンイニウム) を制圧した。そして彼らは、ローマ文化を徹底的に破壊しながら、ブリトン人を含むケルト族を西部に追いやった<sup>50)</sup>。

追われていったケルト族の1部は、ウェイルズや、コーンウォールに逃げ、また他の1部は、450年頃ガリア北西部のアルモリカ (ARMORICA) 地方に渡来し、定住した。このアルモリカは、ガリアの中で最も荒れ果てた地方の1つであった。この地に、ブリタニアから渡来したブリトン人が、自分たちの住む定住地を建設した。その定住地は、昔住んでいたブリタニアよりも小さい地域であった。

そこで、その定住地を、ブリトン人は、小さなブリタニアと呼んだ。

アルモリカはすでにフランク族のフランス語圏内に入っていたので、小さなブリタニアは、プティット=ブルターニュ (Petit Bretagne: 小さなブリトン人の土地) と呼ばれるようになった。

反対に、昔住んでいたブリタニアを、グラン=ブルターニュ (Grand Bretagne: 大きなブリトン人の土地)、と呼んだ。これは、現代英語読みのグレート=ブリテン (Great Britain) である。

アングロ=サクソンのブリタニアへの渡来、侵入、進攻は、順調に進み、しばらくの間、平穏無事な時を過ごしていた。だが、520年以降になると、ブリタニアは、ヘプターキー (Heptarchy)<sup>51)</sup>、つまり7つの王国に分裂した。すなわち、ケント (KENT)、サセックス (SUSSEX)、エセックス (ESSEX)、ウェセックス (WESSEX)、ノーサンブリア (NORTHUMBRIA)、アングリア (ANGLIA)、マーシア (MERCIA) である。

これは、各地域が、外敵なしに、順調に経済的に発展していった結果であった。

でも、宗教面では混沌としていた。すなわち、ブリタニアでのキリスト教の布教活動が進んでいなかったのである。このことを知ったローマ法王グレゴリウス1世 (Magnas Gregorius I, 590-604) は、596年、アングロ=サクソン人を、再びキリスト教に改宗させるために、修道院長アウグスティヌス (Augustinus Cantobriensis, ?-604) を、派遣させた<sup>52)</sup>。

ローマ法王グレゴリウス1世が修道院長アウグスティヌスを派遣させた背景には、「アングル人は、天使のような顔をしており、天国にいる天使と仲間であるに違いない。」<sup>53)</sup> ということがあり、アングル族をすべてキリスト教に、改宗させたかったからである。

この結果は、多くのアングロ=サクソン人が、キリスト教徒に改宗し成功を収めた。

#### ④ イングランド

その後、757年、アングロ=サクソンの7つの王国を統一したマーシアの王

2007年3月 川瀬 進：ノルマンディー公ギヨーム2世とヘイスティングズの戦い

オッファは、各王にブレトワルダ<sup>54)</sup>の地位を認めさせた。言い換えると、マーシア王オッファが、形式上のイングランド王になったということである。

マーシア王オッファが形式上ブレトワルダのなった時点で、ブリタニアを表記する言葉が、イングランドになった。

イングランド王になったオッファは、その直後から、スカンディナヴィアとノルウェーからきたヴァイキング (the Vikings)<sup>55)</sup>の侵略に対処しなければならなくなった。

スカンディナヴィア人から構成されていたヴァイキングが<sup>56)</sup>、イングランド東部沿岸を攻撃していたのは、790年以降からであった<sup>57)</sup>。この攻撃がしだいに、本格的になってきたのは、793年以降のことである<sup>58)</sup>。

すなわち793年に、ノルウェーからきたノルマン人 (the Normans) が、カレドニア (スコットランド) の北部に上陸し、掠奪し、本格的に南下してきた。

この時、ノルマン人は、フランク王国の北部にも侵入し始めていた。

このノルマン人のフランク王国北部への侵入が、将来、重大な運命を引き起こす要件となった。

このノルマンという名前は、9世紀頃からイングランドとフランスとの両方を攻撃、侵略していたヴァイキングの海賊、すなわち‘北歐人 (the Northmen)’ からきている<sup>59)</sup>。

本格的なノルマン人の侵入、略奪に対して、イングランドの王として戦ったのは、ウェセックス王のエグバート (Egbert, d. 839) である。このエグバートは、802年頃からしだいに、イングランド国内で実権を持つようになり、近隣4王国を征服し、イングランド南部を自分のコントロール下に置き、そして829年、マーシアの王となり、実力で7王国を統一し、正式なブレトワルダになった<sup>60)</sup>。

その後、835年に、デンマークからきたデイン人 (the Danes) が、イングランド東部海岸付近を襲撃、強奪し、西へ向かってきた。

このデイン人が、主としてイングランド内部にまで、またフランク王国の北

部にまでも、侵入し始めていた。すなわち将来、デインロー (Danelaw)<sup>61)</sup> と  
いわれる2つの地域の侵入である。具体的には、イングランド東沿岸地域と、  
フランク王国北部の地域 (セヌ川流域を含む現在のパリ近郊とノルマン  
ディー地方) とである。

ヴァイキングは、海賊であるが、もともとは商人的要素を持った交易者であ  
り、航海者、都市建設者であった。というのは、彼らは最初、自分たちの国  
(ノルウェーやデインマーク) で、収穫できた生産物や獲得物 (鯨油、干物)  
を、イングランドで生産された物 (蜂蜜) と、交換していたからである。

この交換が、より盛んになってくると、さらにより多くの利益を生む。この  
ような流通システムを知ったヴァイキングは、さらなる利益を生むため、交換  
よりも豊饒な生産物の地を、掠奪しようと考えた。すなわち、海賊になり、イ  
ングランドを侵略し、その地で、自分たちの都市を建設しようと考えた。

839年エグバート王が亡くなると、イングランド国内は、再び荒廃し、デ  
イン人の侵入を受けるようになった。

そして、865年、デイン人の攻撃によって、ノーザンブリア、マーシア、  
イースト=アングリア、ウェセックスは、デイン人の軍政支配区に落ちた<sup>62)</sup>。

871年にウェセックスの王に就いたアルフレット大王も、デイン人の攻撃、  
侵入を受け、一時王位を、デイン人に奪われた。

だが、872年に、デイン人の大軍が、ノーザンブリアの反乱を抑えるため、  
呼び戻されたので、アルフレット大王は、生き延びられ、ウェセックスを、再  
び統治することができた<sup>63)</sup>。

さらに、878年1月、ウェセックスへのデイン人の攻撃が、再々度始まった。  
この時のデイン人の攻撃部隊は、ノーサンブリアに呼び戻されていた軍隊を再  
び、ウェセックスに向かわせた部隊であり、それは、指揮官グズルム  
(Guthrum) の率いる大軍隊の1部隊であった。

このことは、この部隊が、大軍ではなく、またかなり疲労した部隊であるこ  
とがわかる。また、デイン人は、侵略に反抗しているウェセックスを落とせ  
ば、全イングランドを征服でき、定住できると考えていた。



結局、このデイン人の大規模な侵略、定住を阻止したのは、ウェセックスの王様であったアルフレッド大王であった。言い換えると、アルフレッド大王は、878年5月、エサンドゥン (Ethandune)<sup>64)</sup> で勝利し、ウェドモアの講和条約 (the Treaty of Wedmore : Peace of Wedmore) により、彼らをウェセックス地方から、追い出すことができたのである。でも、アルフレッド大王は、ノーサンブリアの1部を割譲して、デイン人に渡さなければならなかった<sup>65)</sup>。

このウェドモアの講和条約は、ヴァイキングの攻撃部隊が、ウェセックスから退却すること、また指揮官グズルムとその家臣が、キリスト教の洗礼を受けることを条件に、ウェセックス人とデイン人との勢力範囲を決め、かつウェセックスに残留するデイン人の処遇を決めた協約であった<sup>66)</sup>。

また、このウェドモアの講和条約によって、デイン人は、ノーサンブリアの1部を割譲されたデインロー地方に退却し<sup>67)</sup>、イースト=アングリア (East Anglia) が、デイン人の定住地になった。なお、イングランドの他の地域は、デイン人の手に落ち、彼らの定住地となっていた。

ウェセックスからデイン人が退却することによって、アルフレッド大王は、イングランドの対内外から認められた1国を建設することに成功した。

その後、またデイン人の略奪、侵入が激しさを増してきたので、アルフレッド大王は、896年に初のイングランド海軍 (England's navy) を、創設した<sup>68)</sup>。

また、アルフレッド大王は、イングランドで、アングロ=サクソン人の教育、すなわち学術振興に力を入れた。

その学術振興とは、アングロ=サクソン人のための学校を設立し、ラテン語、特にアングロ=サクソン語、鷹狩、馬術を教え、外国人研究者を招聘し、一般市民の教養を高めた。

また、アングロ=サクソン語で記した最初の歴史記録である『アングロ=サクソン年代記 (Anglo-Saxon Chronicle) 』の編纂を開始させた。

さらに、ラテン語で書かれていたオロシウス (P. Orosius, ?-415) の『世界史 (History of the Ancient World) 』、大法王グレゴリウス1世 (Gregorius I, 590-604) の『牧師の掟 (Cura Pastoralis) 』、ポエティウス (Anicius

Manlius Torquatus Severinus Boetius, c.480-525) の『哲学の慰め (De Consolatione Philosophiae)』、さらに尊者ベダの『イングランド国民教会史』を、アング=ロサクソン語、古期英語の翻訳したことである<sup>69)</sup>。

この尊者ベダの『イングランド国民教会史』が古期英語に翻訳されたことで、イングランドを含むその島全体を表記する言葉として、ブリテンという言葉が出現してきた。

#### ⑤ブリテン

ウェセックスから追い出され、イースト=アングリアにも残留しなかったデイン人は、船に乗り、さらに南下して、デインロー地方であるフランク王国の北部に渡来した<sup>70)</sup>。

すなわち、911年、現在のパリ近郊イヴェリヌ (Yvelines) 県の村において、ヴァイキングのリーダー、ロロ (Rollo) は、シャルル単純王 (Charles the Simple, 898-929) と、デイン人が定住するための口頭契約を結んだ。この口頭契約は、その村の名前をとって、サン=クレール=シュル=エプト条約 (the Treaty of St. Clair-sur-Epte) となった。これにより、ロロは、セヌ川流域ノルマンディー地方の公領を得たのである<sup>71)</sup>。

逆に考えると、シャルル単純王は、フランク王国北部でのヴァイキングの略奪をなくすために、ロロに公領を与え、ロロを自分の臣下とした。また、ロロは、シャルル単純王の臣下となったことで、当然、フランク王シャルルに敬意を払わなければならなくなった。だが、実際は、ロロは、シャルル単純王に対して、敬意を払わなかったのである<sup>72)</sup>。

アルフレッド大王の死後、イングランドのデインロー地方の再征服に乗り出したのは、妹エセルフリーダ (Athelflad, ?-918) の助けを得た長兄王エドワード (Edward the Elder, c. 870-924) である。

長兄王は、デイン人を追い出したデインロー地方に、城砦を築き、防備を完全なものにした。また、長男エドワードは、デイン人を、ハンバーガー河やドイツ北部の領海まで追いやり、攻撃征服した。この長男エドワードの活躍に

2007年3月 川瀬 進：ノルマンディー公ギヨーム2世とヘイスティングズの戦い

対して、今まで、デイン人に侵入に頭を悩ましていたスコット人やウェイルズ人たちは、気を良くし、エドワードを自分たちのリーダーに迎えたがった<sup>73)</sup>。

デインロー地域の回復、すなわちマーシア、ノーサンブリアの再征服を完成させたのは、エドワードの息子であり後継者のアセルスタン(Athelstan, c. 895-939)であった。このことにより、アセルスタン王は、ブリテンの王になった<sup>74)</sup>。また、アセルスタンは、937年のブルナンバラ(Brunanburh)の戦いで、ブリテン王の支配下に入ることに反対であったウェイルズ人とスコット人との連合軍、さらにデイン人を、撃破した。この結果、アセルスタン王は、完全にブリテン王として認められることになった。

その後、しばらく平穏な時期を迎えていたイングランドは、再びスカンディナヴィアからの侵入の危機を招き、結果的には征服されてしまった。その原因は、イングランド王エセルレッド2世(Ethelred II, 978-1016)の失策にある。

991年、ノース人(the Norse)と、主にデイン人とが、エセックスに攻撃を仕掛け、モールドン(Maldon)の会戦になってしまった。この時、イングランドの指揮官は、エルダーマン(Alderman)のプリトノート(Byrhtnoth)であった。プリトノートの活躍にも拘らず、エセックスは、デイン人に占領されてしまった。これに対処するために、言い換えるとデイン人に、イングランドの領土から出て行ってもらうために、エセルレッド王は、デイン軍隊に多額のお金を差し出した、すなわち、土地課税であるデインゲルト(Danegeld: デイン人のお金)の創設、支払いであった。<sup>75)</sup>

このイングランド王エセルレッド2世の行為は、愚かな行為と呼ばざるを得ない。というのは、再度、味を占めたデイン人が、イングランドに、デインゲルトを要求しにやってくるからである。

イングランド国民に重税を強いらせた、直接税である経済的負担の重いデインゲルトの額は、下記の通りであった<sup>76)</sup>。

第1回目の支払い	991年	10,000	ポンド（銀）
第2回目の支払い	994年	16,000	
第3回目の支払い	1002年	24,000	
第4回目の支払い	1007年	36,000	ポンド（2通の古写本）
イーストケントの支払い	1009年	3,000	
第5回目の支払い	1012年	48,000	
第6回目の支払い	1014年	21,000	
		158,000	ポンド（銀）

このデインゲルトは、デイン人にお金を与えて、イングランドの領土から出て行ってもらおうという、屈辱的なお金であった。言い換えると、無分別王エセルレッド2世は、イングランドの領土を守るだけの力が無かったということである。また、このデインゲルトは、当然、国民にとって、土地重課税であり、イングランドの社会、経済、財政、行政、軍事にかなりの影響を与えた<sup>77)</sup>。

また、このデインゲルトは、将来、ノルマン=コンクエスト（Norman Conquest）後において、軍事行動を行うための非常に重要な財源となった。

このことは、ウィリアム1世（William I, 1066-1087）が、このデインゲルトを、確実に徴収するために、土地資産に対する最初の大規模な調査、すなわち、租税台帳であるドゥームズデイ=ブック（Domesday Book）を作成させたこと、からもわかる<sup>78)</sup>。

なお、このデインゲルトの徴収は、当時、フェダリズム（Feudalism：封建制度）が浸透していたイングランドにおいては、比較的容易であった。

というのは、10世紀のアングロ=サクソン時代に、もうすでに、自己のエリアを防衛するためにアードルマン（Ealdorman）と称する大地主が存在しており、また彼が、有事の際、兵士となる農場主や小作人たちを支配していたからである<sup>79)</sup>。

各領主は、より多くの領地を獲得するため、常に争いごとを繰り返す。この結果、弱い領主は、自分の領地を守るために、強い領主に吸収されてしまう。

2007年3月 川瀬 進：ノルマンディー公ギヨーム2世とヘイスティングズの戦い

この時点で、強い領主と弱い領主との間に、主従関係が成立する。

なお、アードルマン (Ealdorman) は、クヌート1世 (Cnut I, 1014-35) 時代になると、アール (Earl: 伯) になった。

思いのとおりに993年以降、計画的にかつ大規模な軍隊を引き連れたデーンマーク王のスウェイン=フォークビアド (Swein Forkbeard) の軍隊が、お金を要求し、さらにデイン人が定住してきた。この行為を断ち切らせるために、無分別王エセルレッド2世は、ノルマンディーと同盟を結ばざるを得なくなっていた。

そこで1002年に、海賊のリーダーであるノルマンディー公リシャール1世 (Richard I, Duke of Normandy, 943-996)<sup>80)</sup> の娘エマ (Emma of Normandy, ?-1052) と政略結婚した。なお、エマには、ノルマンディー公家を継承する兄リシャール2世 (Richard II, Duke of Normandy, 996-1026) がいた。

このリシャール2世が、ギヨーム=バタール (Guillaume le Bâtard) の祖父にあたる。

なお、リシャール2世の息子ロベール1世 (Robert I, 1027-1035) は、ギヨーム=バタールの父にあたる。

無分別王エセルレッド2世と、ノルマンディー公の妹エマとの結婚により、1003年頃に、エドワード (後に証誓王: Edward the Confessor, 1042-1066) が誕生した。

このノルマンディーの血を半分引く、エドワード証誓王の誕生は、イングランドの歴史、経済に重大な要件をなしてくる<sup>81)</sup>。

### Ⅲ. ギヨーム2世

無分別王エセルレッド2世がノルマンディー公の妹エマと政略結婚した、同年1002年11月12日に、この無分別王エセルレッド2世は、イングランドに在住しているデイン人を、虐殺した<sup>82)</sup>。この虐殺に激怒したデーンマークの王スウェイン=フォークビアドは、イングランドを占領するよう指示を出し、イン

グランド国内の治安を一層悪化させた。

このことに身の危険を感じた無分別エセルレッド2世は、ノルマンディーに亡命した<sup>83)</sup>。

デンマークの王スウェイン=フォークピアドは、1003年には、すでにノルウェーの大部分を征服しており、今度は本格的に、イングランドの征服にも乗り出した。

1013年、デンマーク王スウェイン=フォークピアドは、新しい軍隊を引き連れ、イングランド占領のためにやって来た。そして、イングランド国内で快進撃を続けていた彼は、デインロー地方の人びとによって、イングランド王として受け入れられた。

言い換えると、1013年に、デンマーク王スウェイン=フォークピアドは、イングランドのデインロー地方を占領し、そして、その地方の人びとたちによって、王として認められたのであって、全イングランドを征服したわけではなかった。

そして、その占領の1年後、1014年に亡くなったスウェイン=フォークピアド王に変わって、息子のクヌート (Cnut I, 1014-35) が、デインロー軍隊によって、イングランド王に選ばれた。

だが、無分別王エセルレッド2世が亡命先のノルマンディーで亡くなった1016年には、イングランドで、アングロ=サクソン王を選挙するウイタン、あるいはウイテナジモット (賢人評議会) が開催され、エセルレッドの息子エドマンド (Edmund I, ?-1016) を、イングランド王に選出した<sup>84)</sup>。

これにより、イングランドの王位を争って、クヌート1世 vs. エドマンド1世という構図が現れた。

エドマンド1世は、土地重課税であるデインゲルトが、あまりにも過酷であるために、すなわち、それを廃止させるために、クヌート1世に戦いを挑んだのである。

結果は、エドマンド1世が、自分の臣下に、暗殺されたことにより、ウイタン、あるいはウイテナジモットは、仕方なしに、敵であったクヌート1世を、

2007年3月 川瀬 進：ノルマンディー公ギヨーム2世とヘイスティングズの戦い

イングランド王に推挙した。

このことにより、イングランド国民は、抵抗していたクヌート1世に、服従しなくてはならなくなった。

そして、クヌート1世が、ブリテンの王になった。また、彼は、全スカンディナヴィア（ノルウェーとデンマーク）帝国の王にもなった。

クヌート1世が、イングランド国内で、内政を強化している間、ノルマンディーでは、ロベール1世が、支配しており、彼の息子が1027年頃に誕生していた。

その息子の名はギヨーム（Guillaume）で、私生児として生まれたので、ギヨーム＝バタール（Guillaume le Bâtard）という名がついた<sup>85)</sup>。

ここで、ノルマンディー時代に過ごしたギヨーム＝バタールの名前の呼び方について、規定する。というのは、規定した名前のほうが、時代的背景が良くわかるからである。

- ・ c.1027以降、ギヨーム＝ル＝バタール（Guillaume le Bâtard）
- ・ 1035年7月3日以降、ノルマンディー公ギヨーム2世（Duc de Normandie Guillaume II）
- ・ 1066年12月25日以降、イングランド王ウィリアム1世（William I）
- ・ 1087年9月9日まで、ウィリアム1世、占領したマンテ（Mantes）城に行く途中落馬、それが原因で死去

イングランドの統治を始めたクヌート王は、エセルレッドの未亡人エマを、妻にした。この結婚は、デイン人とイングランド人とを平等に扱い、イングランドの内政を、より一層強化したいとするクヌート1世の意思の現われであった。

1014年になると、イングランドにおけるデインゲルトの徴収は、一般的になっていた。

クヌート1世も、財政確保のため、より多くの兵士たちに土地を与え、地租であるデインゲルトを徴収しなければならなかった。

そこでクヌート1世も、いままで通りデインゲルトの徴収を続けたのである

が、ノルウェーとデンマークから連れて来た自分の兵士たちに対しは、軍事奉仕に対し、土地ではなく、給料を支払った。

この兵士たちの給料は、当然、いままで行われていたデインゲルトの徴収の中から、支払われた。

また、この兵士たちは、イングランドに来ると、クヌート2世の親衛隊になった。つまりその兵士たちは、クヌート1世のハウス=カールズ (House Carles: 最も優れた精鋭歩兵: 常備軍) になったのである<sup>86)</sup>。

ハウス=カールズは、このデインゲルトの地租によって、生活した。

そこで、クヌート1世時代になると、このデインゲルトは、ハウスカールズの生活費の他、艦船の維持費に当てられた地租を指すようになってきた。

クヌート王には、3人の子供がいた。

1. クヌート1世と、ノーサンプトンのアエルフギフ (Aelfgifu of Northampton) との間にできた子ハロルド (後のHarold I, 1035-40)、走るのがノウサギのごとく速かったため、ノウサギ足のハロルド (Harold I Harefoot)。
2. クヌート王と、未亡人エマとの間にできた子クヌート (後のCnut II, ハルダクヌート, Harthacnut, 1040-42)。
3. 未亡人エマと、前イングランド王のエセルレッド2世との間にできた子エドワード (後のEdward the Confessor, 1042-1066)。

イングランド王クヌート1世が、1035年に亡くなると、実子の2人は、順調に王位を継承していった。

ハロルドがハロルド1世になる前、つまりクヌート1世が1035年11月に亡くなる前、ギヨームバトルが、1035年7月に、ノルマンディー公ギヨーム2世になっていた。

ハロルド1世と、ハルダクヌート王とは、順調に王位を継承したものの、行政には、目に余る物があり、イングランド国民にとっては不評であった。

また、エマの連れ子エドワードは、無事1042年にイングランド王位を継承した。このエドワードは、敬神者であったため、証誓王という呼び名が付けられ



た。

エドワード証誓王は、イングランド王になったのだから、イングランドに住しなければならなかったのであるが、イングランドでの生活を、あまり好んでいなかった。というのは、エドワード証誓王は、青年時代の大半を、ノルマンディーで過ごし、また、当時イングランドよりも教養面での文化的水準、および貿易面での経済的水準が高かったこのノルマンディーを好んでいたからである。

フランスでは、フェダリズムが確立しており、封建領主、すなわち、独立した伯領が、かなりの勢力を持ち始めていた。言い換えると、フランスでは、個々の独立した伯領が、それぞれのよく組織された公国を形成していた、ということである。

ノルマンディーの生活を、そのままイングランドに持ち込もうとして、エドワード証誓王は、積極的に家臣に土地を与え、主従関係、つまりフェダリズムを、本格的に取り入れようとした。

言い換えると、エドワード証誓王は、個々の独立した封建国家を、形成させようとしたのである。

フェダリズムが、本格的にしっかりと確立してくると、当然そこには、確固とした地租収入が、王室に入ってくるのである。

当然、エドワード証誓王は、ノルマンディーからイングランドに、居住を移したからといって、英語は喋れなく、ノルマンディーのノルマン=フランス語しか喋れなかった。

ノルマンディーひいきということが、例えば、フェダリズムの導入であるが、エドワード証誓王が、イングランドで執務を行うパートナーとして、2人の人物を選び、土地を与えられたことから、判断できる。

1人目は、ノルマン人で、ジュミエジ (Jumièges) のロバート (Robert)<sup>87)</sup> であり、2人目は、ノルマン人であるリチャード (Richard) である。

なお、この2人は、当然イングランドの土地が与えられる条件として、ノルマンディーから連れられて来られた。そして、このジュミエジのロバートは、

至上権を有したカンタベリー大司教になった<sup>88)</sup>。また、リチャードは、ヒールフォード (Herford) に、イングランド最初の石造りの城、リチャードキャスル (Richard's Castle) を建造した<sup>89)</sup>。

エドワード証誓王は、ノルマンディーから、自分に支持してくれる家臣を多数、イングランドに連れて来て、土地を与え、フェダリズムを広めていった。エドワード証誓王の行政手腕といえば、フェダリズムの普及ぐらいだけであった。

これに反して、エドワード証誓王の宗教への力の入れ具合は、相当なものであった。すなわち、その力の入れ方は、エドワード自身がキリスト教に改宗し、1050年ウェストミンスター=アベイ (Westminster Abbey) を創建させたことである<sup>90)</sup>。そして、これらのことが評価され、証誓王と称されたのである。

イングランドにおいて、半分ノルマンの血を引くエドワード証誓王の行政に対して、快く思っていなかったのは、アンチ=ノルマンであるアングロ=サクソンの血を引くゴドウィン (Godwin, ?-1053) であった。

ゴドウィンは、クヌート王に重用され、1020年からウェセックス伯 (Earl of Wessex) になり<sup>91)</sup>、また、ハルダクヌート王の時は、不在勝ちであったハルダクヌート王を助け、イングランドの治安を守り、1042年エドワードが王位を継承するにあたっては、スムーズに安全に、段取りを付けた人物である<sup>92)</sup>。

エドワード証誓王が、イングランド王に就いた時期は、ウェセックス伯ゴドウィンと友好的な関係であった。というのは、エドワード証誓王は、ゴドウィンの娘エディス (Edith) を、妻にしていたからである。

だが、ウェセックスでアール (Earl) の地位を最大限に活用し、そして巨大な権力を得たゴドウィン伯は、ノルマン人優遇政策を推し進めているエドワード証誓王に、反発し始めた。このアンチ=ノルマンの考え方は、イングランド国内で広がった。

そこで、1051年に、エドワード証誓王 vs. ウェセックス伯ゴドウィンという構図ができた。

イングランド国内の一般的な考え方とは逆に、ウェセックス伯ゴドウィンとその息子たちは、ブローニュのコスタス伯（Eustace of Boulogne）の件で、政府軍に追いつめられ1051年に、イングランドから亡命しなければならなかった<sup>93)</sup>。

その亡命せざるを得なかった原因は、次の通りである。

コスタス伯は、法的にエドワード証誓王と血縁関係にあり、コスタス伯がエドワード証誓王に会いに、イングランドの南ドーヴァーにやって来た。そのドーヴァーで1泊した時、コスタス伯が、ドーヴァーの住民と予想通りのトラブルを起こした<sup>94)</sup>。

そのトラブルの原因は、エドワード証誓王が、計画されていたドーヴァー城の城主に、コスタス伯を、就任させようとしていたことにある<sup>95)</sup>。

そのトラブルを解決せよ、というエドワード証誓王の命令を、ウェセックス伯ゴドウィンが拒否したからである。この拒否の理由は、アンチ=ノルマンという考え方が念頭にあったウェセックス伯ゴドウィンが、このトラブルを起こしたコスタス伯を、イングランドから、実力で追い出せると考えたからである。

1051年に、ウェセックス伯ゴドウィンが亡命して、イングランドに居なかった時、イングランドは、ノルマン人にとって、平和な時期になり、そこでノルマンディー公ギヨーム2世が、エドワード証誓王に会いに来た。その会いに来た理由は、エドワード証誓王の母が、法的にノルマンディー公の血筋であり、そこで、近親感を持ち、友好を深めに来たのであった。

すなわち、ノルマンディー公ギヨーム2世の渡航理由は、エドワード証誓王との血縁関係にあることの確認である。

この1051年のこの時に、イングランド史を左右する重大な約束が行われた<sup>96)</sup>。

この重大な約束とは、エドワード証誓王が、キリスト教の普及ばかりに力をいれ、政である行政に対して、あまり関心を示さなかった、彼自身の優柔不断から端を発していた。

その重大な約束とは、エドワード証誓王が、自分がイングランド王位に就けたのは、ノルマンディー公ギヨーム2世のおかげであり、そして、そのお礼として、また、自分に子供がないことを鑑みて、自分が退いた後のイングランド王位は、ノルマンディー公ギヨーム2世に譲るという内容であった<sup>97)</sup>。

すなわち、ノルマンディー公ギヨーム2世に対して、エドワード証誓王が交わした王位譲渡の約束である。

この王位譲渡の約束が、5年後の1066年に、ヘイスティングズの戦いを引き起こす最大原因になった。

#### IV. ヘイスティングズの戦い

エドワード証誓王によるギヨーム2世への王位譲渡の約束は、約束であって、確実なものではなかった。というのは、イングランド王という地位に就くには、ウィタン、あるいはウイテナジモットと称されるアング=ロサクソン賢人評議会の議を経て、選出されるのが通例であったからである。でも、実際は、有力なアール(Earl)によって、決定される場合が多かった。

この王位譲渡の約束に気を良くしたギヨーム2世は、希望を抱いたまま、ノルマンディーに帰った。

だが、その1年後、1052年に形勢は逆転し、ゴドウィンとその息子ハロルド(後のHarold II, c. 1020-1066, 1066年1月-10月)は、大艦隊を引き連れ、イングランドに舞い戻ってきた<sup>98)</sup>。

舞い戻ったゴドウィンは、すぐにアールの地位を回復し、アンチ=ノルマン政策を押し進め、ノルマン人をイングランドから、追い払った。

1053年にウェセックス伯ゴドウィンが亡くなると、息子のハロルドが後を継ぎ、ウェセックス伯ハロルド2世になった。この時期から、ハロルド2世は、勢力を拡大し始めた。

そして、ハロルド2世は、2人の弟ジルスとレオフィン(後のEarl Gyrrh: 後のEarl Leofwine)のためイースト=アングリア伯領を手に入れ、さらに、1055年、ノーザンブリアのシワード伯(Earl Siward)が亡くなったとき、そ

2007年3月 川瀬 進：ノルマンディー公ギヨーム2世とヘイスティングズの戦い

のノーザンブリア伯領を、弟のトスティグ（後のEarl Tostig）のため、獲得した<sup>99)</sup>。

このことによって、ハロルド2世の勢力範囲は、マーシアを除いて、ほとんどのイングランド地域にわたった。

そこで、ハロルド2世は、力によって、全イングランドを、掌握できると考えた。

反対に、ゴドウィン王家と友好的になっていたエドワード証誓王だが、イングランドで最大勢力になったハロルド2世に対して、危機感を感じていた。

というのは、エドワード証誓王は、ノルマン的習慣で育ち、自分の後の後継者は、当然、ノルマン人のギヨーム2世に、指名したかったからである。

だが、王位譲渡の権利は、エドワード証誓王に無かった。

というのは、王位譲渡は、ウィタン、あるいはウィテナジモットで選出、決定されるからである。

当時イングランド国内では、王の権力よりも、各アールの力が強かった。このことは、エドワード証誓王の行政能力が、かなり低下しており、ウィタン、あるいはウィテナジモットで、ノルマンディー公ギヨーム2世を、イングランド王に、押し切る力はなかった。

そこで、エドワード証誓王は、ノルマンディー公ギヨーム2世を、自分の後継者にするということを、内外に告知させるために、言い換えると、その旨をウェセックス伯ハロルド2世に知らしめるために、また、その旨をノルマンディー公ギヨーム2世に報告するために、ハロルド2世を特使として、1064年にノルマンディーに向かわした。

この1064年のエドワード証誓王の告知の様子は、イングランド史としては、第1級の史料であるバイユーのタペストリー（La Tapisserie de Bayeux）の第1場面に描かれている<sup>100)</sup>。

イングランド王位を狙っているハロルド2世にとっては、ノルマンディー公ギヨーム2世の存在が邪魔になる。そして、ちょうど良い時期に特使として、また情報を集めるために、1064年、ウェセックス伯のハロルド2世は、ノルマ

ンディーのギヨーム2世に、会いに行くことにした。

その会いに行く途中、ハロルド2世は、嵐のため海難事故に遭い、ポンティユー伯ギイ (Graaf Guy de Ponthieu) に捕らわれた<sup>101)</sup>。そして、身代金を支払い、そのポンティユー伯ギイから救ってくれたのは、ノルマンディー公ギヨーム2世であった。

なお、この様子は、バイユーのタペストリーの第13場面に見ることができる。

ギヨーム2世は、会いに来てくれたことに対する敬意と、自分の傘下に置くために、自分の娘アレフジバ (Aelfgye) を、ハロルド2世に嫁がすことに決め、ハロルド2世と約束をした。

この約束の様子は、バイユーのタペストリーの第15場面に見ることができる。

だが、この結婚の約束は、ハロルド2世が、無視して、グルフィズの妃オールジス (Aldgyt) と結婚したため、叶わなかった。

またその1064年のすぐ後に、ノルマンディー公ギヨーム2世は、ブルターニュ公コナン (Conan, Duca di Bretagna) の宣誓布告を受けた。それに対処するために、ギヨーム2世は、ハロルド2世の援助を要請した<sup>102)</sup>。

この様子は、バイユーのタペストリーの第16場面に見ることができる。

このコナンによる宣戦布告の結果は、ノルマン軍の活躍により、ギヨーム2世の勝利に終わった。また、この勝利の一助となった、ハロルド2世を、ギヨーム2世は、自分の家臣である騎士 (Ridder) に叙した。

この約束の様子は、バイユーのタペストリーの第21場面に見ることができる。

結果的に、ハロルド2世は、救ってくれたことに対するそのお礼として、また、自分を高く評価してくれていることに対して、ノルマンディー公ギヨーム2世に、次期イングランド王に就かないと約束した。

すなわち、ハロルド2世の王位継承権の行使辞退である。

でも、この約束は、ハロルド2世にとっては、約束させられたものであつ

2007年3月 川瀬 進：ノルマンディー公ギヨーム2世とヘイスティングズの戦い

た。というのは、野心家であるギヨーム2世の冷酷な条件付約束であり、ハロルド2世にとって選択の余地がなかったからである。その条件は、当然、ギヨーム2世がイングランド王位に就くための、ハロルド2世のサポートである。

この約束を法的、宗教的に確実なものにさせるために、ギヨーム2世は、キリスト教聖人の2つの骨の上に、ハロルド2世の手を置かせ強制的に誓わせた<sup>103)</sup>。

この誓約の様子は、バイユーのタペストリーの第23場面に見ることができる。

また、このハロルド2世の誓約、そして裏切りは、ヘイスティングズの戦いの最大要因である。というのは、ギヨーム2世が、聖戦に賭けてまでも、ハロルド2世を、打ち負かそうとしたからである。

そして、その誓約を胸に閉まったまま、ハロルド2世は、イングランドに戻った。

1065年、イングランドのほぼ実権を握っていたハロルド2世が、イングランドに帰ったすぐに、弟のトスティグ伯がノーザンブリアでの悪行と失策のため、イングランドから追放された。弟のトスティグの悪行、残酷さがあまりにも目に余るものであったため、兄ハロルド2世は、弟トスティグのイングランド追放には、正当性があるとして、そのままにしておいた。

逆に、弟トスティグは、兄ハロルド2世へのリベンジ (revenge) に燃えた。

その1年後の、1066年1月2日に、エドワード証誓王が亡くなった。

エドワード証誓王の遺体が、セント=ピーター (St. Peter) 教会の運ばれる様子が、バイユーのタペストリーの第26場面に見ることができる。

だが、バイユーのタペストリーの次の第27~28場面では、エドワード証誓王が、最後の遺言を行う場面がある。

王の死より前に、葬儀の場面があるということは、非常に奇妙なことである。

このことは、ただ単に下絵の前後をミスしただけのことであろう。作者には、何ら意図が無いように思われる。また、1066年の事柄だけに集中しすぎて、1065年の事柄には、簡略化されていることから、ただ単に、下絵の前後をミスしただけのことであるように思われる。

もし、ミスで無いとするならば、エドワード証誓王の死が、あまりのも悲しくて、葬儀の場面を、先に持ってきたのではなかろうか。

そして、1066年1月6日、ウェセックス伯ハロルド2世は、順調にウィタン、あるいはウィテナジモットの推挙よって、カンタベリー大司教スティガンド(Stigand)のもと、戴冠式を行い、イングランド王に就任した。

戴冠式において、ウェセックス伯ハロルド2世に、剣と宝玉、王杖が授けられる様子が、バイユーのタペストリーの第30場面に見ることができる。なお、この場面によると、スティガンドがハロルド2世の右側に立っていた。

でも、エドワード証誓王が亡くなった時点で、王位継承順位からいうと、無分別王エセルレッド2世の曾孫エドガー＝アセリング(Edger Atheling, c. 1050-c. 1130)の方が上位であった。だが、エドガー＝アセリングは、若すぎて、イングランドを治める力がまだ備わっていなかった。また、ハロルド2世は、実力があり、南部に広大な伯領を有していた。このようなことを鑑みて、ウィタン、あるいはウィテナジモットは、迷わずにハロルド2世を、イングランド王に、推挙したのであった。

また、このイングランド王位の就任を執り行ったスティガンドは、正式な聖典の手順を踏まえない教会分離主義者であったので、法王から破門されていた。そこで、スティガンドは、正式なカンタベリー大司教としては認められない、すなわち法王庁から認可されていない人物であった<sup>104)</sup>。

このハロルド2世のイングランド王の就任に対して、快く思っていなかったのが、イングランドから追放された悪行高いハロルド2世の弟トスティグと、ノルマンディー公ギヨーム2世とであった。

この2人は、王位継承を決定したイングランドの公的なウィタン、あるいはウィテナジモットに異議ありとした。



地位が回復されていない弟トスティグは、すぐにハロルド2世へのリベンジのため、イングランドの侵略を考えた。

また、ノルマンディー公ギヨーム2世も、戦争の準備に取り掛かった。

ノルマンディー公ギヨーム2世が戦争を考えた理由は、当然、3つの事柄による。

- ①エドワード証誓王と法的に血縁関係にあること。
- ②1051年、エドワード証誓王の王位譲渡の約束。
- ③1064年、ハロルド2世の王位継承権の行使辞退の誓約。

この血縁関係と、2つの約束を盾に取り、ノルマンディー公ギヨーム2世は、戦争の準備を始めた。

その戦争の準備の手始めに、ギヨーム2世は、ローマ法王に対し、カンタベリー大司教スティガンドは、正式な手続きを踏まえないで、今に地位に就いたとし、その解任を訴え、自分のイングランド王への請求権の正当性を訴えた<sup>105)</sup>。

そして、ローマ法王を味方に付けたノルマンディー公ギヨーム2世は、聖戦を旗じるしにした聖旗のもと、輸送艦船の建造、船員の増員、軍隊の増強にかなりの資金と、歳月を費やしていた<sup>106)</sup>。

この軍隊の増強というのは、言語が異なる外国の傭兵を、フランス語が通じ、指揮命令系統が理解できるまで、訓練したということである。

艦船の建造の様子は、バイユーのタペストリーの第35場面から36場面にかけで見ることができる。

その後、多数の艦船は、進水を行い、艦隊を組み、そして、セーヌ川 (Seine) とオルネ川 (Orne) との中間、ダイヴ河口 (Daives) に集結させられた。その艦隊に搭乗させる騎士、歩兵も集結させられ、また軍馬も集められた。

なお、武器となる鎖かたびら、鼻当てが付いた円錐形のかぶと、剣、凧形の楯、戦闘用の斧、槍、軍馬、そしてワインが、艦船に積み込まれた。この様子は、バイユーのタペストリーの第37場面に、見ることができる。

1066年秋、軍備の整ったギヨーム2世は、ダイヴからイングランド南部に向かかって出航した。だが、暴風に遭い、ノルマンディーのサン=ヴァレリー=スール=ソンム (St-Valery-sur-Somme) に漂着した<sup>107)</sup>。

そして、そのソンム川の河口サン=ヴァレリーで、再度イングランドへ出航するまでの間、戦闘員である騎士、歩兵は、再び、徹底的に指揮命令系統を、教え込まされた。

戦争の準備を行っているというギヨーム2世の動向を聞きつけたハロルド2世は、イングランド南部、ワイト島 (Isle of Wight) の沖に、艦船を配備した。

また、その時期、社会的信頼に不適切で、兄ハロルド2世へのリベンジ考えていた弟トスティグは、イングランド王位を要求していたノルウェー王のハラール=ハルドラーダ3世 (Harald Hardrada III, 1042-66) と、手を組んでいた。そして、その2人の実行が、イングランド北部ノーザンブリアへの侵入へととなった。

弟トスティグとハラール=ハルドラーダ3世とは、ノーザンブリアを支配し、またハロルド2世の妻オールジス (Ealdgyth : Aldgyth) の兄弟である、ノーザンブリア伯モルケア (Morkere, Earl of Northumbria) と、マーシア伯エドウィン (Edwin, Earl of Mercia) とを、ヨーク近郊で撃破した。

イングランド王ハロルド2世は、この情報を聞き、ギヨーム2世の侵入のため、南部海岸沿いに陣を組んでいた軍隊のうち、護衛兵を連れて急遽、北部ヨークに向かった。そして、1066年9月25日、スタムフォード=ブリッジの戦い (the Battle of Stamford Bridge) になり、結果は、1066年9月27日、ハロルド2世が、勝利を収めた<sup>108)</sup>。

この戦いは、ヘイスティングズの戦い、あるいはセンラックの戦い (the Battle of Senlac) の前哨戦であった<sup>109)</sup>。

ハロルド2世軍が北部で戦っている間、すなわちイングランド東南部が手薄になっていたところを、軍事力を整えたノルマンディー公ギヨーム2世が、翌日の1066年9月28日、イングランド、サセックス、ヘイスティングズの西南へ

2007年3月 川瀬 進：ノルマンディー公ギヨーム2世とヘイスティングズの戦い

ヴェンジー（Pevensey）に上陸した<sup>110)</sup>。

なお、ヨークからペヴェンジーまでの距離は、250マイル離れている<sup>111)</sup>。

ペヴェンジーに上陸したギヨーム2世は、軍備を整えるためヘイスティングズに、人造の小さな丘陵に木造の要塞を建設した。このような要塞は、ノルマンディーの威勢、勢力の象徴として建てられたものである。

それは、バイユーのタペストリーの第45場面から46場面の中間に見ることができる。

なお、このような要塞は、バイユーのタペストリーの中のうち、ブルターニュでは第17場面、バイユーでは第22場面で見ることができる。

1066年9月27日夕方、セント=ヴァレリーを出航し、翌日9月28日に、ペヴェンジーに上陸したギヨーム2世軍は、約500-700隻の艦隊でもって輸送された軍馬、弓兵、工兵隊であった<sup>112)</sup>。

ノルマンディー公ギヨーム2世の上陸を聞いたハロルド2世は、また急遽、南部へと駆けつけなければならなかった。この時、ハロルド2世の妻オールジスの兄弟、モルケア伯と、エドウィン伯とは、ヨーク近郊での助けたもらった恩義を忘れ、ハロルド2世と行動を一緒にしなかった<sup>113)</sup>。

この当時のギヨーム2世の軍事力と、ハロルド2世の軍事力とは、下記の通りであった<sup>114)</sup>。

#### 1066年当時のアングロ=サクソン王ハロルド2世の軍事力

(主力武器；楯、長い戦闘用の斧)

ハウスホルド（Household：近衛隊）	500人
フィアード（Fyrd：民兵）	7,000人
セイン（Thegn：貴族；重装備歩兵）*	500人
合計	8,000人

#### 1066年当時のノルマンディー公ギヨーム2世の軍事力

(主力武器：騎馬、弓矢)

兵力(人)：フランスのフランドル人	1,500人
ノルマン人	4,000人
ブリトン人	2,000人
合計	7,500人

船舶(隻)と騎士(人)：

1. ウィリアム=フィッツオズバーン	60隻	-
2. アヴランティーのヒュー	60隻	-
3. モントフォルトのヒュー	50隻	60人
4. フェカンブのレミジウス	1隻	20人
5. セント=オウエンの大修道院長ニコラス	15隻	100人
6. ユーステス伯ロバート	60隻	-
7. ダウノウのフルク	40隻	-
8. セネスチャールのゲロルド	40隻	-
9. エプロクス伯ウィリアム	80隻	-
10. モントゴメリーのロジャー	60隻	-
11. バウモントのロジャー	60隻	-
12. バイユーの司教オド	100隻	-
13. モルティン伯ロバート	120隻	-
14. ウォールター=ギファード	30隻	100人
合計	776隻	280人**

また、この2つの軍勢力を別の面から見ると下記の通りになる<sup>115)</sup>。

ハロルド2世のアングロ=サクソン軍

総勢：7,000人

2,000：ハウス=カールズ (House Carles：最も優れた精鋭歩兵)

5,000：間に合わせの武器を持った近隣諸州の未熟な兵士

### ギヨーム2世のノルマン軍

総勢：7,000人

3,000：鎖かたびらをまとった騎馬兵

4,000：訓練を受けた騎士と弓兵

ハロルド2世は、ヨークから約250マイル弱の距離を、傷つき、疲弊し、そして激減したハウスホルド、セイン、フィアードと共に、1066年10月6日、ロンドンに帰ってきた。

このフィアードの中には、戦争当日の10月14日や、その数日前に駆けつけた者が多く、弓の取り扱い方を忘れ、また騎馬での戦い方を教わっていなかった<sup>116)</sup>。

そして、ハロルド2世は、1066年10月13日、ロンドンからヘイスティングズにいたる街道、すなわち‘灰色のリングの木’が立っているセンラック=ヒルの北側カルドベック=ヒル (Caldbec Hill) に、到着した<sup>117)</sup>。

この時、ハロルド2世のアングロ=サクソン軍は、センラック=ヒルの麓に流れているサンドレイク小川 (Sandlake Stream) の北側、すなわちセンラック=ヒルの山頂に、中央部をハウスホルド、そして両翼を地元の農民出身、フィアードで固めた‘サクソンの楯の壁 (The Saxon Shield Wall)’、すなわち楯の壁の輪を作り、陣を取った。

ハロルド2世の戦術は、どんなことがあっても、また、敵陣が仕掛けてきても、自分の命令があるまでは、兵士は持ち場を去らず、決して山頂で輪になった楯の壁を壊さなく、敵陣の最接近でもって、長く重い戦闘用の斧で戦う、ということであった。

ハロルド2世軍は、ほとんどが歩兵であったので、近距離戦でしか戦えなかったのである。

なお、ハロルド2世軍の軍旗は、ウェセックスの金龍旗<sup>118)</sup>と、ハロルド自身創案の「戦士 (Fighting Man) 」旗<sup>119)</sup>である。

このハロルド2世軍の軍旗は、バイユーのタペストリーの第57場面で見ることができる。

これに対して、ギヨーム2世のノルマン軍は、サンドレイク小川の南部、センラック=ヒルのやや低い所に、一列目に弓兵隊、二列目に重装備投槍歩兵隊、そして三列目に騎馬兵隊、右翼にフランスのフランドル軍、中央にノルマン軍、左翼にブルターニュ軍を引き、陣を取った<sup>120)</sup>。

なお、この騎馬兵は、「『封建制度において十分に訓練を受けた騎馬兵』<sup>121)</sup>」であった。

ギヨーム2世の戦術は、3つの段階に別れ、まず初めに、前列の弓兵隊が矢を射り、敵に動揺を与えたところで、二列目の投槍歩兵隊が、槍を楯の壁の中に投げ込み、そして三列目の騎馬兵が、敵を打つということであった。

ギヨーム2世軍は、弓兵隊を装備していたので、矢が届く遠距離戦で戦えたのである。

なお、ギヨーム2世軍の軍旗は、ヒラヒラが付いている半月旗と、ワタリカラスが描写させた旗（神聖な法王旗）である<sup>122)</sup>。

このギヨーム2世軍の軍旗は、バイユーのタペストリーの第48場面と第49場面との中間で見ることができる。

これら両者の戦術を、もう少し詳述してみる。

ポジション的には、山頂に位置するアングロ=サクソンの方が、有利であったが、科学的な戦術によって、もうすでに勝敗が決まっていたかもしれない。

というのは、アングロ=サクソン軍は、デイン人時代から続いている旧型の伝統的な戦闘方式、つまり、接近戦の戦いであり、楯でもって楯の壁をつくり、敵方の攻撃を防ぎ、そして、長い戦闘用の斧でもって攻撃するという戦法であった。

これに対して、ノルマン軍は、新型の科学的戦闘方式、つまり、距離を置く戦いであり、前衛というポジションに、重要な弓兵隊を配置させたからである。

当然、この前衛の弓兵隊は、敵方と距離を置き、相手にダメージを与えるも

2007年3月 川瀬 進：ノルマンディー公ギヨーム2世とヘイスティングズの戦い

のである。この前列での弓兵隊の登場は、ヘイスティングズの戦いで初であった<sup>123)</sup>。

1066年10月14日、午前9時、ついにヘイスティングズの戦いが始まった<sup>124)</sup>。

最初に戦闘の口火を切ったのは、ギヨーム軍の、弓兵隊である。この弓兵隊の攻撃で、センラック=ヒルの山頂で陣を取っているハロルド軍の楯の壁は、多少傷ついたが、ハロルド軍には、弓兵隊をほとんど持っていなかったため、ギヨーム軍は、無傷であった。

そして、ギヨーム軍の重装備歩兵が、槍と剣で、ハロルド軍の楯の壁の中に挑んだ。まず初めに槍を、楯の壁の中に投げ込み、剣と楯で敵陣突破を図った。

その後、今度は重装備騎馬隊が、槍を投げたり突き通したり、剣で切り倒したりして、敵陣の中に、突入を試みた。

だが、ハロルド軍の楯の壁は、楯と長い戦闘用の斧で攻撃したため、戦局を決定するような傷を負わなかった。

ノルマン軍が、アングロ=サクソン軍の丸い輪状の楯の壁を、攻撃している様子が、パイユーのタペストリーの第51場面から第52場面の間、第53場面から第54場面の間で見ることができる。

戦闘開始の午前9時から2～3時間、このような硬直状態が続いた。そしてその後、ブルターニュ軍の重装備騎馬隊が、アングロ=サクソン軍に、効果のあるダメージを与えようと、接近戦を挑んだ。だが、結果は、功は奏さなかった。前進過ぎて、傷を負ったノルマン軍の左翼ブルターニュ軍は、士気が薄れ、ターンして沼地の方に逃げ出した<sup>125)</sup>。

傷を負い、沼地の方に逃げ出したブルターニュ軍を、訓練を受けていないハロルド軍の右翼隊フィアードが執拗に追撃した。ハロルド2世は、楯の壁を守るために、追撃をやめるように命令したが、フィアードは、勝利を信じて、追撃をやめなかった。

この執拗な追撃によって、センラック=ヒルの山頂に陣を取っていた楯の壁の1部が崩れ始めた<sup>126)</sup>。

士気が低下しているノルマン軍にとって、さらなるマイナス要因が、発生した。すなわち、ギヨーム2世が死亡したという噂である。

これに対して、ギヨーム2世は、戦局不利と判断し、まず、この噂を打ち消すために、自らの円錐形のかぶとの鼻当ての部分を受け、臣下たちに顔を見せて、軍の士気を回復させた。

ギヨーム2世が、味方に顔を見せている様子が、バイユーのタペストリーの第55場面に、見ることができる。

そして、騎馬隊を、ブルターニュ軍救援のため向かわせた<sup>127)</sup>。

そして、ノルマン軍は、即、追撃したフィアードの後方に回り、挟み撃ちで、この追撃したアングロ=サクソン軍の右翼隊フィアードを撃破した<sup>128)</sup>。

正午頃になると、両軍は疲弊し、しばしの安息が流れた。そして、両軍は、状況の把握に努め、ポジションの確認をした。

その時、ハロルド2世は、訓練を受けていない兵士の無謀な行動により、デフェンスラインが長く伸びすぎて、多数の右翼隊が損失したことを知った。そこですぐに、ハロルド2世は、軍を移動させ、陣を楯の壁で輪になるよう建て直しを図った<sup>129)</sup>。

午後になると、堅牢な楯の壁を突破するために、ギヨーム2世は、より激しい攻撃でもって、急襲をかけることにした。この急襲が、功を奏し、ハロルド2世の2人の弟ジルズ伯とレオフィン伯とを殺害した。

そして、ギヨーム2世は、ハロルド2世軍の抵抗を、最終的に立つために、下記の2つの輝かしい戦術を使用した<sup>130)</sup>。

①山頂で楯の壁を作り、陣を取っているアングロ=サクソン軍を、おびき出すために、急襲の後、すぐに偽りの退却をすること。すなわち、谷に、敵兵おびき出すことによって、楯の壁を壊し、そして、谷に来た孤立した敵兵を、虐殺する戦術。

②火の点いた矢を、空高く、敵陣の無防備な頭に、雨のごとく射ること。すなわち、空からの集中的な矢に、アングロ=サクソンを動揺させることによって、ノルマン軍の騎馬隊が、楯の壁に突入する戦術。



この2つの戦術により、戦局がノルマン軍の方に傾いた。

ノルマン軍の猛攻撃により、アングロ=サクソン軍の指揮命令系統は、絶たれた。また、この猛攻撃の時、ハロルド2世は、ノルマン軍の流れ矢を、右目に受け、亡くなった<sup>131)</sup>。

ハロルド2世が、右目に矢を受けた様子が、バイユーのタペストリーの第57場面で見ることができる。

ハロルド2世の死亡により、アングロ=サクソン軍は、戦闘能力を失い、センラック=ヒルから逃げ出した。時間は、午後の4時ごろであった。

この時点で、1066年10月14日のヘイスティングズの戦いは、ノルマン軍、ギヨーム2世の勝利で終わった。

そして、ノルマンディー公ギヨーム2世は、阻まれていたロンドンへの道を進み、1066年12月25日、ウェストミンスター=アベイで、戴冠式を挙げ、晴れてイングランド王ウィリアム1世となったのである。

## V. おわりに

ギヨーム2世が、執拗なまでもイングランド王位に拘った理由は、自分の出生にある。それは、私生児として生まれたからである。ノルマンディー公国の貴族の私生児として、生まれながら裕福であったにもかかわらず、また、跡を継ぎ、ノルマンディー公となったとしても、それは公国なので、フランス国王の家臣に過ぎなかったのである。

ギヨーム2世が、野望を抱き、1国の国王になるには、どうしても、どんな手を使っても、イングランド国王になるしか、なかったのである。

そこで、ギヨーム2世は、ハロルド2世がイングランド王になった時、王位継承に対して、かなり強引なクレームをつけ、イングランド王位奪取に専念したのである。

王位継承に対して、ギヨーム2世の順位は、ハロルド2世よりも低かった。

また、バイユーのタペストリーの第1場面では、「エドワード証誓王が、ハロルド2世に対し、ギヨーム2世へのイングランド王位の後継者になることを

告知する任務を、与えている」ストーリーがある。

このタペストリーは、ギヨーム2世の血縁関係者によって、製作させたものである。

このようなことを鑑みても、ギヨーム2世は、武力でしか、イングランド王位を奪取できなかったのである。

この武力の実施が、1066年のヘイスティングズの戦いであった。

また、この1066年のヘイスティングズの戦いの意義は、デインゲルトの創設以来、イングランドのキャピタリズム（資本主義）が発生するまでの、1移行過程の要因であった、と考えられるのである。

というのは、835年のデイン人の侵入が、イングランドでの「格差」を引き起こす要因になったからである。イングランド内に侵入したデイン人が、略奪、そして定住を行うことによって、フェダリズム（封建制度）内での領主たちに、富める者と富まざる者という「格差」を生じさせた。

この富める封建領主が、より多くの貨幣資産を蓄積させるためには、地租からの税収入を確実にすること、すなわち租税台帳であるドゥームズディ=ブック（Domesday Book）作成させなければならなかった。この点に目を付けたのが、ウィリアム1世である。

言い換えると、ウィリアム1世が、イングランドの経済発展を考え、資本主義の発生に、尽力したと考えられるのである。

注)

- 1) John Blair, *The Anglo-Saxon Period (c.440-1066)*, in Kennerh O. Morgan ed., *The Oxford History of Britain*, Repr. of 1984, ed., Oxford University Press, 1990, p.60.
- 2) Thomas Hodgkin, *The History of England: from the Earliest Times to the Norman Conquest, to 1066*, in William Hunt and Reginald L. Poole, eds., *The Political History of England*, Vol.1, Repr. of 1914, ed., AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p.295.
- 3) Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, Third Edition, Repr. of 1943, ed., Oxford University Press, 2001, p.1.
- 4) ・ Cf. Woodward, E. L., *A History of England*, Repr. of 1947, ed., London: Methuen & Co. Ltd, 1984, p.18.  
・ Cf. Richard Bailey, *The Cambridge Cultural History*, Vol.1, Early Britain, in Broriss Ford, ed., Repr. of 1988, ed., Cambridge University Press, 1992, p.104.

- ・ Cf. Michael Alexander, *The Cambridge Cultural History*, Vol.1, *ibid.*, p. 181.
- ・ Cf. Isabel Hendersou, *The Cambridge Cultural History*, Vol.1, *ibid.*, 213.
- 5) Bede, *A History of the English Church and People*, Translated and with an Introduction by Leo Sherley-Price, Revised by R. E. Latham, in Robert Baldick, Betty Radice, C. A. Jones, eds., Repr. of 1955, ed., Penguin Books, 1975, p.1.
- 6) ベーダは、673年頃にダラムのモンクウィアマスで生まれ、7歳の時、地元の修道院に入り、その後ジャロー修道院に移り、703年に司祭になった。その後ベーダは、自分の生涯を執筆と教育に捧げた。その執筆の中には、多くの科学的・神学的・歴史的著作物がある。また、ベーダの弟子には、ヨークの大司教・エグバート (Egbert, 802-893) がいる。このエグバートは、7王国時代最後の宗主権を獲得した人物である。8世紀暗黒時代、イングランドについての多くの情報は、原史料である文書や口述書に対して、調査や真偽の確認を行ったベーダの歴史的著作物、また彼の骨身を惜しまない多くの努力に、依存している。さらに、ベーダは、キリスト誕生 (紀元後) からの出来事を年代的に区分した分類方式を、一般化させた。このような業績から、ベーダは、1899年、聖人に推挙され、「尊者」という敬称を得た。The *Hutchison Illustrated Encyclopedia of British History*, Repr. of 1995, ed., Helicon Publishing Ltd, 1996, p.35.
- 7) Bede, *A History of English Church and People*, *op. cit.*, p.37.
- 8) ロー=カントリーズは、現在のベネルックス (Benelux)、すなわちオランダ、ベルギー、ルクセンブルクに相当する地方である。
- 9) Black, J., *A History of the British Isles*, Macmillan Press, 1996, pp.2-3.
- 10) Black, J., *A History of the British Isles*, *ibid.*, p.3.
- 11) Hawkes J., Stone Age to Iron Age, in Boris Ford, ed., *The Cambridge Cultural History of Britain*, Vol.1, Early Britain, Repr. of 1988, ed., Cambridge University Press, 1992, p.12.
- 12) このビーカー族の名の由来は、副葬品として出土した土器が、特徴的な大杯 (Drinking-vessel) を、していたからである。Halliday, F. E., *A Concise History of England, from Stonehenge to the Microchip*, Repr. of 1989, ed. Thames and Hudson Ltd., 1991, p.18.
- 13) Hodgkin, T., The History of England, from the Earliest Time to the Norman Conquest, in William Hunt and Reginald Poole, eds., *The Political History of England*, Vol.1, Repr. of 1906, ed., AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p.6.
- 14) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, Trafalgar Square Publishing, 1992, p.12. ケルト人がハルシュタットに住み着いた理由は、巨大な岩塩地帯が存在していたからである。最初のうち、岩塩採掘の労働者の給料 (salary) は、金で支払われていた。その後、塩の需要が高まると、彼らの給料は、高価な塩 (salt) で支払われるようになった。つまり、高価な塩は、金と同様な価値を持つようになり、ソルト (salt: 塩) が、サラリー (salary: 給料) という意味の語源になったのである。
- 15) Peter Salway, *The Oxford Illustrated History of Roman Britain*, Oxford University Press, 1993, p.15. 文字を持たないケルト族のブリトン人が話していたケルト言語には、幾つかあった。そして、ローマ帝国後ケルト語が、Pサウンドのブリトン語と、Qサウンドのゴイデル語に分かれた。Pケルト語 (ブリトン語) は、ウェイルズ語、コーンウォール語、ブリタンニアの移民からもたされたプルターニュのブリトン語になり、Qケルト語 (ゴイデル語) は、アイルランド語、ゲール語、マン島語、アイル

ランド移民からもたされたスコットランド=ゲール語になった。

- 16) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, op. cit., p.23.
- 17) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, *ibid.*, p.35.
- 18) Woodward, E. L., *A History of England*, Repr. of 1947, ed., Cambridge University Press, 1984, p.2.
- 19) ガリア (Gaul: Gallia) は、古代ケルト人の土地であり、古代ローマ帝国の属州である。現在のフランス、ベルギー、オランダ南部、スイス、ライン川以西のドイツを含む地域。
- 20) Cf. Woodward, E. L., *A History of England*, op. cit., p.2.
- 21) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, op. cit., p.25.
- 22) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, *ibid.*, p.26.
- 23) Woodward, E. L., *A History of England*, op. cit., p.2.
- 24) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.32.
- 25) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, op. cit., pp.33-35. 女王「ボアディケア」の本名は、「ボウディカ」(Boudica)である。
- 26) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, *ibid.*, p.35.
- 27) Peter Salway, Roman Britain (c.55BC-c.AD440), in Kennerh O. Morgan ed., *The Oxford History of Britain*, Repr. of 1984, ed., Oxford University Press, 1990, p.24.  
ハドリアヌスの長城は、ボウネス (Bowness) から、ウォルゼン (Wallsend) まで達した防壁である。
- 28) Peter Salway, *The Oxford History of Britain*, *ibid.*, p.24. アントニヌスの長城は、オール=ドキルパトリック (Old Kilpatrick) から、キャリデイン (Carriden) まで達した防壁である。アントニヌスの芝土塁の遺跡についての調査報告書や、その街道での石版のスライドを、現在グラスゴー大学の図書館で、購入することができる。
- 29) Anne S. Robertson, *The Antonine Wall*, Revised and edited by Lawrence Keppie, Repr. of 1960, ed., Glasgow Archaeological Society, 1990, p.1.
- 30) Cf. Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, op. cit., p.46.
- 31) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.67.
- 32) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.71.
- 33) Peter Salway, *The Oxford History of Britain*, op. cit., p.51.
- 34) Peter Salway, *The Oxford History of Britain*, *ibid.*, p.55.
- 35) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.69.
- 36) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, op. cit., p.49.
- 37) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, *ibid.*, p.49.
- 38) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., pp.72-3.
- 39) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.73.
- 40) Peter Salway, *The Oxford Illustrated History of Roman Britain*, op. cit., p.321.
- 41) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, op. cit., p.49.
- 42) Woodward, E. L., *A History of England*, op. cit., p.7.
- 43) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.79.
- 44) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, op. cit., p.50.
- 45) Cf. Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, *ibid.*, p.50.
- 46) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.88.

- 47) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, op. cit., p.50.
- 48) マーシャの王ウルフヒアーは、イングランドだけではなくブリタニアの統治者、すなわちプレトワルダになった。Cf. Christopher Brooke, *The Saxon and Norman Kings*, Third Edition, Repr. of 1963, ed., Blackwell Publishers Ltd., 2001, p.89.
- 49) このウィタン、あるいはウィテナジモットとは、賢明な人びとの会合で、最高裁判所を兼ねたアングロ=サクソン政府の賢人評議会である。ウィタン、あるいはウィテナジモットでの賢人な人びととは、王族、大地主、司教である。当時のイングランドの統治は、簡単なものであり、このウィタンで審議、決定された内容が、イングランド王への助言となった。この内容でもって、イングランド王は、戦争、友好、平和などの内外問題を、解決していった。
- 50) Halliday, F. E., *A Concise History of England, from Stonehenge to the Microchip*, op. cit., p.27.
- 51) このヘプターキー (Heptarchy)、つまり7王国は、紀元800年以前に、イングランドに存在した王国であった。
- 52) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.116.
- 53) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.115.
- 54) プレトワルダ (Bretwalda) は、古代英語のBretenanwealdaから来ている。意味は、アングロ=サクソン人だけに付けられたイングランド王の名称。
- 55) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, op. cit., p.50.
- 56) Cf. Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.257, n.1.
- 57) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.257.
- 58) John Blair, *The Oxford History of Britain*, op. cit., p.91.
- 59) M. T. Clanchy, *England and its Rulers 1066-1272*, Second Edition, with an epilogue on Edward I (1272-1307), Repr. of 1983, ed., Blackwell Publishres Ltd., 1998, p.19.
- 60) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.264.
- 61) デインローとは、9世紀末、デイン人自身が占領したイングランド北東部地方、およびフランク王国の北部地方に対し、デイン人自身が施行した法律。このデインローは、イングランドの半分の北東部まで及んだ。なお、このデインローが行き渡った所は、デインローという地名になった。
- 62) John Blair, *The Oxford History of Britain*, op. cit., p.92.
- 63) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, op. cit., p.76.
- 64) エサンドゥン (Ethandune) は、ウィルトシャーのエディントン (Edington) にある小さな田舎。Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.285, n.1.
- 65) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.285.
- 66) Cyril E. Robinson, *England; A History of British Progress from the Early Ages to the Present Day*, New York: Thomas Y. Crowell Company, 1928, p.27.
- 67) Halliday, F. E., *A Concise History of England, from Stonehenge to the Microchip*, op. cit., p.34.
- 68) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.312.
- 69) Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, Third Edition, Repr. of 1971, ed., Oxford University Press, 2001, pp.271-275.
- 70) Halliday, F. E., *A Concise History of England, from Stonehenge to the Microchip*, op.

- cit., p.34.
- 71) J. R. Moreton Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, Repr. of 1915, ed., Ams Press Inc., 1971, p.91.
- 72) Georges Duby, *France in the Middle Ages 987-1460*, From Huge Cape to Joan Arc, Translated by Juliet Vale, Repr. of 1987, ed., Blackwell Publishers, 1991, pp.82-3.
- ・ヴァイキングのリーダー、ロロが、シャルル単純王に対して、頭を下げない、すなわち敬意を払わなかった理由は、ロロが単純王と対等の立場であると考えていたからに他ならない。というのは、サン＝クレール＝シュール＝エプト条約が、シャルル単純王にとって、仕方なく結ばざるを得なくなった条約であったからである。その条約の背景には、当然、ロロがフランク王国北部で、略奪、定住、勢力範囲を拡大していたことにある。
- 73) Cf Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, op., cit., p.334.
- 74) Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, *ibid.*, p.340.
- 75) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.381.
- 76) ・Ann Williams, *Kingship and Government in Pre-Conquest England c.500-1066*, Macmillan Press Ltd., 1999, p.115.
- ・Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.382.
- 77) このデインゲルトは、アングロ＝サクソン期からノルマン＝コンクエスト (Norman Conquest) 後、すなわち、エセルレッド 2 世の 991 年から、1162 年まで、続けられた土地課税である。最初、このデインゲルトは、デイン人と和平を結ぶための賠償金 (地租として徴収) であり、その後、ハロルド 2 世のハウス＝カールズ (House Carles : 最も優れた歩兵) の維持費、さらに、ノルマン王朝では、軍事行動の財政資金となった。
- 78) このドゥームズデイ＝ブックは、ウィリアム 1 世征服王が、イングランドの王領から、税金を平等に徴収するために、1086 年に作成させた土地台帳である。言い換えると、このドゥームズデイ＝ブックは、地租を評価するために、王領の価値を確かめるために、また、家臣バロン (Baron : 貴族) の勢力を見積もるために、1086 年に作成されたイングランドの地租調査記録である。
- 79) Cf Cyril E. Robinson, *England*, op. cit., p.34.
- 80) R. Allen Brown, *The Normans*, Repr. of 1984, ed., The Boydell Press, 1994, p.19.
- 81) Cf Cyril E. Robinson, *England*, op. cit., p.33.
- 82) Cyril E. Robinson, *England*, *ibid.*, p.32.
- 83) John Blair, *The Oxford History of Britain*, op. cit., p.108.
- 84) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.396.
- 85) ギヨーム＝バタールは、ロベール 1 世とファレーズ (Falaise) の皮革商人の娘アレット (Arlette) との間にできた私生児であった。
- 86) Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, op. cit., p.412.
- 87) Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, *ibid.*, p.464.
- 88) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, op. cit., p.457.
- 89) Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, op. cit., p.562, n.1.
- 90) Christopher Brooke, *The Saxon and Norman Kings*, Third Edition, op. cit., p.128.
- 91) クヌートは、全イングランドの王になるや否や、治安を強化するために、イングランドを 4 つの伯領、ノーザンプリア、マーシア、イーストアングリア、ウェセックス

に分けた。そして、クヌートは、ゴドウィンと、そのウェセックスの伯領に、重用した。伯とは、司法、軍事、経済面に関してすべての権限を与えられた階層のことを言い、伯の称号を得た者は、伯領内で絶大な権限を有していた。伯の頂点が、国王である。

- 92) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.404 and p.417.
- 93) Cf. Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, pp.453-5.
- 94) Ann Williams, *Kingship and Government in Pre-Conquest England c.500-1066*, *op. cit.*, p.140.
- 95) Ann William, *The English and the Norman Conquest*, Repr. of 1995, ed., The Boydell Press, 1997, p.15.
- 96) R. Allen Brown, *The Normans*, *op. cit.*, p.68.
- 97) Christopher Brooke, *The Saxon and Norman Kings*, Third Edition, *op. cit.*, p.28.
- 98) John Blair, *The Oxford History of Britain*, *op. cit.*, p.117.
- 99) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p.38.
- 100) バイユーのタペストリー (La Tapisserie de Bayeux) は、ノルマンディー公ギヨーム2世の異母弟であり、バイユーの司教であるオド (Odo, c. 1030-1097) が制作させた中世ヨーロッパを代表する芸術作品の1つである。このタペストリーは、フランスのノルマンディー、ベサン地方の中心地バイユーにある。また、このタペストリーが保管されている場所は、「バイユーのタペストリー (ギヨーム征服王会館, Centre Guillaume le Conquérant)」であり、所在地は、Rue de Nesmond, F. 14400 Bayeux である。バイユーのタペストリーは、薄い麻地 (70m×0.5m) に羊毛の糸で、刺繍を施したもので、ノルマンディーギヨーム2世が、イングランドを征服していく模様を、1066年のヘイスティングズの戦いまで綴ったものである。このバイユーのタペストリーは、ノルマン人がアングロ=サクソンを凌駕していく様子を知る上で、第1級の史料となっている。なお、第1場面としたその数字は、タペストリーの上に刺繍されている番号を示すもので、58までの番号があり、58場面の歴史的重要なストーリーがある。
- 101) Christopher Brooke, *The Saxon and Norman Kings*, *op. cit.*, p.138.
- 102) Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, *op. cit.*, pp.577-8.
- 103) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p.39.
- 104) R. Allen Brown, *The Normans*, *op. cit.*, p.72.
- 105) Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, *op. cit.*, p.624.
- 106) Cf. Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.476.
- 107) R. Allen Brown, *The Normans*, *op. cit.*, p.78, and p.78, n.88.
- 108) Stephen Morillo, *Warfare under the Anglo-Norman Kings 1066-1135*, The Boydell Press, 1994, p.131.
- 109) この1066年のヘイスティングズの戦いは、別名センラックの戦いともいう。というのは、ハロルド2世とギヨーム2世とが最初に出会った場所が、センラック=ヒル (Senlac Hill) であったからである。1066年当時のセンラックの丘は、住む人が居ない、ただ単に「灰色のリングの木」が立っているだけであった。Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, *op. cit.*, p.594, n.1.
- 110) Cf. Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.482.
- 111) Richard Glover, "English Warfare in 1066", *The English Historical Review*, Vol.

- 67, January, 1952, p.2.
- 112) Geoff Hutchinson, *The Battle of Hastings 1066*, J M Dent & Sons Ltd., 1998, p.4.
- 113) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.484.
- 114) Christopher Gravett, *Hastings 1066, The Fall of Saxon England*, Osprey Publishing Ltd., 1992, p.20.より作成。
- \* グラヴェット氏は、このところを、fyrd militia (民兵軍) としているが、軍という組織立ったものになると、指揮命令系統が、直接に行き届かなければならぬ貴族でなければならない。そこで、アングロ=サクソン時代、貴族であり、重装備騎馬兵でもあり、王の有事の際、歩兵でもあったセイン (Thegn) とした。
- \* \* この船舶と騎士との数値は、おそらく106年12月13日、あるいは1017年以降に編纂されたものである。
- 115) Alison Neil, *The 1066 Story, Hastings Castle*, England: Booker & How Ltd., p.3.より作成。
- ・ この *The 1066 Story, Hastings Castle* は、出版年とページ番号が無い小冊子である。p.3 と番号を打ったのは、表紙とうら表紙を除いて、表紙のうらp.1 として数え、3 番目にあたるので、p.3 とした。なお、この小冊子は、いろいろな原典史料からの絵画や、史実をもとに、執筆、出版されたものである。
- 116) Richard Glover, *The English Historical Review*, Vol. 67, *op. cit.*, p.1.
- 117) カルドベック=ヒルは、'灰色のリンゴの木' が立っているセンラック=ヒルの北側に位置する丘である。
- 118) Christopher Gravett, *Hastings 1066, op. cit.*, p.34.
- 119) Charles Oman, *A History of England*, Revised Edition, Repr. of 1902, ed., New York: Books for Libraries Press, 1972, p.64.
- 120) ・ Cyril E. Robinson, *England, op. cit.*, p.42.  
・ Geoff Hutchinson, *The Battle of Hastings 1066, op. cit.*, pp.6-7.
- 121) Richard Glover, *The English Historical Review*, Vol. 67, *op. cit.*, p.15.
- 122) Christopher Gravett, *Hastings 1066, op. cit.*, p.22.
- 123) Cf. Cyril E. Robinson, *England, op. cit.*, p.42.
- 124) Michael St John Parker, *William the Conqueror and the Battle of Hastings*, Pitkin Pictorials, 1996, p.12.
- 125) ・ Geoff Hutchinson, *The Battle of Hastings 1066, op. cit.*, p.8.  
・ Christopher Gravett, *Hastings 1066, op. cit.*, p.68.
- 126) Michael St John Parker, *William the Conqueror and the Battle of Hastings, op. cit.*, p.13.
- 127) ・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.489.  
・ Christopher Gravett, *Hastings 1066, op. cit.*, p.68.
- 128) Geoff Hutchinson, *The Battle of Hastings 1066, op. cit.*, p.8.
- 129) Cf. Geoff Hutchinson, *The Battle of Hastings 1066, ibid.*, p.9.
- 130) Geoff Hutchinson, *The Battle of Hastings 1066, ibid.*, p.10.
- 131) Christopher Gravett, *Hastings 1066, op. cit.*, p.77.